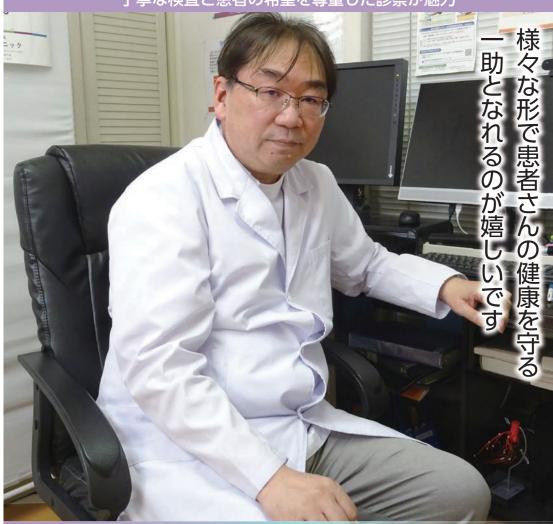
### の日治医 明日の医療を支える信頼のドクター

### 高血圧・睡眠時無呼吸症候群の エキスパートドクター

翼な検査と患者の希望を尊重した診察が魅力



医療法人甲翔会かい内科クリニック

達也 斐 甲

合わせた治療を行っている。そんな甲斐院長が特に力を入れている生活習慣病。 を入れているのが特徴だ。 院長の甲斐達也医師は「コツコツやる」を座右の銘に、 |入れているのが特徴だ。『狭山池まつり』といった季節ごとのイベントが充実しているのも魅大阪府南部に位置する大阪狭山市は、落ち着きのある静かな雰囲気を活かして子育て支援に力 かい内科クリニックは、そんな暮らしやすい町の中に位置している。 患者の生活に寄り添い、

添っているのだろうか。 日々診察に当たっている。 睡眠時無呼吸症候群に関しては開業前の勤務医時代から取り組んでおり、エキスパ 多様化する健康面での人々の悩みに、 甲斐院長はどのようにして寄り 中でも高血圧や 患者と歩幅を

## 医師として経験を積む中で感じた 激動の医師人生を歩みながら実力を身に着けて 理想の医療

研修医として初めての勤務先は救命救急センターの心臓部門。緊急を要する患者が集まる中で 1992年に医師免許を取得後、近畿大学医学部附属病院の循環器内科に入局した甲斐院長。 施す処置が命に直結する重要な部署に足を踏み入れたのが、 医師人生の始まりだった。

を構築して全力で患者と向き合った。 一般病棟勤務では、 受け持った末期がん患者のために1カ月半病院に泊まり込み、 24時間体制

院では消化器疾患と救急医療を重点的に学ぶとともに内科疾患全般の診療を行うなど医師とし その後は大学院にて血圧に関する研究に従事し医学博士の学位を取得する一方で、 出向先の病院から大学病院に戻った後は、 脳神経内科に出向し 出向先の病



なるべく患者の希望に沿い、 相談しやすい雰囲気作りを心掛けている

医学部長からの要請で済生会富田林病院へ赴任

その後は高血圧・

老年内科の講師

生会富田林病院内科臨床研修指導責任者として、 これまで培ってきた知識と技術を活かして、循環器内 医局長として後進の指導に当たった。 科部長として高血圧や心血管疾患の治療に当たると共 15年間にもわたり近畿大学医学部附属病院で勤めた 13日沐病院内科臨床研修指導責任者として、入職日本内科学会認定内科指導医としての立場から済

が必ずあります」 院していただいていた患者さんが来て下さりましたが、医師と患者さんの間には相性というもの 「開業したての頃は、 そして2020年7月、 しかし、 地域の皆様に受け入れてもらえるかどうか、不安でした。 その不安は杞憂だったようで、 前任の院長から引き継ぎ、晴れてかい内科クリニックが開業した。 践するなど、新しい挑戦への準備を怠ることはなかった。 広げた。その後、実際にクリニックに勤務し診療を実 患や血液透析治療を学び、対応できる診療科目の幅を た甲斐院長。他院に内科部長として赴任して脳神経疾 ような医療を提供したい」という想いが強まってい する内科研修医の指導を行った。 そんな日々を過ごす中で、 甲斐院長の治療は地域の患者に受け入 「自分にとって理想となる 前任の頃から通

つ

供したいと考えていた医療を提供できていると思います」と手応えを語る。 かい内科クリニックが開業して3年半(2024年1月現在)。甲斐院長は、 「かつて自分が提

れられている。

# 2つの高血圧の性質を見極めることが重要

睡眠時無呼吸症候群と高血圧の深い関連性

「高血圧は成人病の中でも特に患者数が多い疾患です。内科以外の医師からもアムロジピンなど中でも積極的に取り組んでいる疾患の1つが『高血圧症』だ。 循環器、 高血 圧、脈管、 老年病など様々な領域での専門医資格を有する甲斐院長。

降圧薬を処方することができ、初期治療のハードルが低いと言えます」

鐘を鳴らす。 薬剤を服用しさえすれば、 確かに血圧値は下がる。 しかし甲斐院長はこのような対症療法に警

てはまるのかをきちんと調べないと、 「高血圧には『本態性』と『二次性』、2つの分類があります。患者さんの高血圧はどちらに当 適切な治療が出来ません」

圧のこと。たとえば肥満や運動不足といった生活習慣の乱れが原因として挙げられる。 『本態性高血圧』とは原因疾患が無く、遺伝的素因や生活習慣が複合して引き起こされる高血

高血圧を指す。 にアルドステロンというホルモンが自律的に分泌過多になり高血圧を引き起こす。 『二次性高血圧』 たとえば とは、 『原発性アルドステロン症』という疾患は、 血圧を上昇させる要因となる病気の存在により引き起こされる 副腎に原因疾患があるため

ようにきちんと検査しなければ、原因疾患を見落としてしまう危険性があります。二次性高血圧 は血圧値のみを正常化させても心血管疾患の発症リスクはあまり低下 みると、原発性アルドステロン症により引き起こされた二次性高血圧が原因だったのです。この 「済生会富田林病院に勤務していた頃、脳卒中を繰り返してしまう患者さんが居ました。 しな いことも多いので、 調べて

### **日治** (D) 明日の医療を支える信頼のドクター

かい内科クリニック ういった事態を防ぐためにも、

当たり5回以上ある状態を『SAS』といいます。頻度が1時間に15回以上もしくはSAS「気道の狭まりや閉塞により、睡眠中、10秒以上の呼吸停止もしくは気流の大幅な低下が1 甲斐院長が力を入れて取り組んでいるもう1つの疾患が『睡眠時無呼吸症候群 S A の時 症間

内科の専門医への早めの受診をお勧めします

状を伴う場合には、治療を考えることになります」 肥満や鼻中隔湾曲症 (鼻腔を隔てる中心の仕切りが曲がっている状態) などが原因の1 った。

がれてしまうこともある。 そのほか、日本人の場合は下顎の骨格が小さいために舌が収まりきらず、 睡眠時に気道が舌に塞

昇と下降を何度も繰り返しているのです」 腔が一気に広がり、同時に血圧も一気に上昇します。 「SASとはすなわち呼吸を堪えているのと同じ状態です。 つまり1時間の睡眠の内、血圧が激しい上窓です。我慢していた呼吸が再開されると胸

る可能性もある。このように、 血圧が激しく変動する間に体内に血栓が飛び、 SASとは様々な疾患を併発する恐れのある危険な疾患なのだ。 寝ている間に脳梗塞や心筋梗塞が引き起こされ

### 治療の鍵は 睡眠時無呼吸症候群への多様なアプローチ \*治療の継続と生活習慣の改善

組んでいたのがSASの診療だった。 クリニック開業前、 済生会富田林病院に在籍していた甲斐院長。 既にSASと関わりの深い二次性高血圧に力を入れてい 当時、病院全体をあげ て取 1)



睡眠時無呼吸症候群(SAS)に対する基本的な治療 『持続陽圧呼吸療法(CPAP)』

確保することに繋げられる。 スを装着すると下顎が前に出た形で固定されるため、 いた治療も積極的に取り入れている。SAS用のマウスピー クリニックではこのCPAP治療の他、 空気を送り込む装置に接続された鼻マスクを装着し、

疾患や心血管に関する疾患は特に力を入れて取り組んでいます」

SASに対する基本的な治療とされているのが『持続陽圧呼吸療法 (CPAP)』という治療法

甲斐院長はCPAP治療が保険適応になった1998年からCPAP装置を用

った1998年からCPAP装置を用いた、気道に空気を送り込むことで無呼吸を改

治療を開始しており、約25年の診療経験を有する。

マウスピースを用

気道を

いという想いが第一にあったのです。こうして開業した今も、当院の特色として血圧に関する「高血圧やSASを放置していると起こるかもしれない、動脈硬化や脳心血管疾患を予防した

善させる。

甲斐院長は、同病院にてSAS治療に関わっていく。

さん専用に製作します。しかし、下顎が出すぎた状態で固定 連携を図っています」 な歯科医をリストアップし、患者さんに紹介するという形 せん。当院ではそういった加減を見極められるほど経験豊富 をあまり出さないように固定すると効果が殆ど認められま されてしまうと、顎関節症を招く恐れもあります。逆に下顎 「このマウスピースは患者さんの歯型に合わせてその患者 ぐ

方法が用意されており、様々な状況の患者に対応が可能だ。 これらのように同院ではSASに対する豊富なアプローチ それらの治療法でSASが根本的に回復するとい

47

うわけではな

甲斐院長は語った。 てしまう要因そのものを取り除いているわけではありません」 の』ということです。塞がっている気道を空気圧によって広げることはできますが、気道が塞がっ 「私がよく患者さんにお伝えするのは、『CPAPなどの治療法は、 それを理解した上で1番大切なのが「長期的に治療を続けつつ、 生活習慣を見直すこと」だと いわば眼鏡と同じようなも

# 患者の声を取り入れ見出したかい内科クリニック独自の検査法 正確に検査を行うための工夫の数々

リーニング検査することで数値を把握する。 し ずは簡易睡眠検査。パルスオキシメー 内科クリニックではSASの治療と共に、 ター と呼吸センサー 検査にも力を入れている。 を装着し、 睡眠中の様子をスク

ていただくのです」 「機械の装着もそれほど難しくないため、 している業者がご自宅まで検査キットをお送りしますので、患者さんの状態をご自身で計測 患者さんのご自宅で検査していただきます。 当院と契

必要になる点だという。 より詳細なデータが必要な場合は 酸素飽和度などを調べることが可能な検査だが、ネックは通常の病院の場合、 『終夜睡眠ポリグラフ検査 (PSG)』を行う。 脳波 検査入院が や呼吸

「患者さんの中には、自宅で毎晩のように軽い晩酌をするのが習慣になっていたり、 夜中にな つ

の普段の生活を再現できない恐れがある」と危惧する。 てから眠りについたりする人も少なからずいらっしゃいます。 しか 通常の入院だと患者さん

とが言えます」 とアルコー 「SASが悪化する大きな原因の1 結果が過小評価されます。 ルが規制され、患者さんの普段の生活習慣が再現されないまま検査が実施されてしま悪化する大きな原因の1つとして、日常的な飲酒が挙げられます。ですが、入院する 入院中の生活リズムと実生活のリズムのずれに対しても、 同じこ

した。 甲斐院長は勤務医時代、 この検査時における患者の健康状態のギャ ップを埋めるべ く四苦八苦

ともありました」 するため、 9るため、検査入院の直前でもなるべく普段通りに生活、飲酒をしてもらうようにお願いするこ「当時勤めていた病院の規定違反を犯さず、なおかつ患者さんの普段の健康状態を少しでも再現

試行錯誤を重ねた末、現在同院では理想的な方法で検査を実施することが可能に になった

を回収し、 着していただき、あとは普段通りの生活を送ってもらいます。翌日には再び技師が訪問 「患者さんのご自宅に検査機器を扱う技師を派遣するというやり方です。ご自宅で検査機器を装 検査を実施するという仕組みにしたのです」 して機器

通り入院しての検査を希望する場合には、 この方法であれば入院の負担もなく、 普段の健康状態のまま検査が可能となる。 入院での検査の段取りを行う。 もちろん通常

地域のホ 「患者さんの健康を守る一助となれるのが嬉 ムドクター としてあらゆる悩みにも対応

49

## 

理

### 甲 斐 達也 (かい・たつや)

1992年、近畿大学医学部を卒業。

近畿大学病院第一内科にて初期研修後に大学院へ進学。

卒業後は堺市内の総合病院にて勤務後、近畿大学医学部高血圧・老年内科講師を務める。 2009年、済生会富田林病院循環器内科部長、睡眠時無呼吸センター長に就任。その後、 さくら会病院内科部長に就任。

2020年7月、「かい内科クリニック」を開設。

所在地

〒 589-0023 大阪府大阪狭山市大野台 6-1-3 TEL 072-366-1366 FAX 072-366-1367

南海バス「大野台6丁目」停留所より 徒歩3分、「西山台南」停留所より徒歩 3分

大阪狭山市循環バス「大野台7丁目北」 停留所より徒歩 4 分、「西山台南」停留 所より徒歩 4分

専用駐車場8台完備(クリニック前4 台、第2駐車場2台、提携駐車場2台)



設 立 2020年

高血圧、睡眠時無呼吸症候群、生活習慣病、循環器疾患、老年科疾患、 診療内容 その他内科全般

〈月・火・木・金〉9:00~12:00、16:00~19:00 診療時間 〈土〉9:00~12:00 〈休診日〉水・日・祝

> 一人一人の患者さんに寄り添い、良質かつ信頼のある医療の提供に努め、 地域医療の発展に貢献する

> > https://kai-clinic.net/



患者目線を第一とした診察や検査を提供している

患者さんを他院に紹介した後日、

がんの早期発見に繋がっ

てから

様々な形で

医師にあるべき姿勢と言える。

『連携』

を着実に遂行することで患者の

内科の領域以外のご相談を受けた際も、

相談

してもらい

やす

6

その患者

気作りです。 命を守る、 患者さんの健康を守る一助となれるのが嬉しいですね」 迅速に手術に繋がったということがありました。開業 たとお礼のお言葉をいただいたことがありました。 「普段の診察で心掛けているのは、 医療職に求められる

あらゆる生活環境や患者の想い それは長年にわたり、 り、人々の生活に密接に関わる高血圧といった疾患の治療にできる限り患者の生活に寄り添った治療を行いたい、という

携わり、

甲斐院長の想い

「やはり当院は高血圧やSASをはじめとする生活習慣病の治療に力を入れておりますから、 沿えるように尽力しています」 さんの悩みに合った先生を紹介し、 に触れてきたからこそ溢れるのだろう。 なるべく患者さんの希望に

とえば検診の結果が良くないなど、 患者の目線を第一とした診察や検査、そして「気になることはなんでも相談できる」 患者にとっての安心へと繋がるのだ。 していただければと思っています 少しでも気になることや心配なことがありましたら、 と思える 1

ような空気が、

院いただき、

医師という仕事の醍醐味を次のように語った。 として患者に寄り添う医療を提供し続ける甲斐院長尓―ムドクターとして、また専門性を発揮したスペ たということがありました。開業し入院患者さんに対する早急な検査の )実施が